

みんなが支える地域社会



全国各地でゴミの不法投棄が問題となつていきます。この問題の要因の一つには、公共モラルの欠如や規範意識の低下が考えられ、解決が難しいようです。しかし、難しいからといって何もしなければなかなか事は解決しません。

今月の『ニューモラル』では、この問題をもとに地域社会の中で、私たち一人ひとりがどのような心で取り組んでいけばよいのかを考えます。

せっかくの散歩コースが……

福田俊明さん（68歳）は、定年退職して

から、毎日昼下がりに家の周りを一時間ほど散歩するのを日課にしています。

郊外の丘陵地帯であるこのあたりは、自然も比較的多く残されており、毎日コースを変えて散歩を楽しんでいます。

中でもお気に入りか、小さな谷間を抜

けるコースで、二百メートルほどにわたって小川に沿った細い道が続いています。両側が雑木林に囲まれ、あまり車も通らず、住宅地のすぐ裏手とは思えないほど静かな道でした。

しかし残念なことにその道の脇には、人目につきにくいため、多くのゴミが捨



てられていました。中にはテレビや冷蔵庫などの電器製品や家具、タイヤなども捨てられています。そうしたゴミが土の中に半ば埋もれ、またその上に新しいゴミが積み重なる状態です。本来ならとても気持ちのよい道であるはずなのに、ゴ

ミがあることでどこか薄気味悪い雰囲気になっていきます。

「このゴミさえなければなあ」

せつかくの自然が心ない人たちの手によって無残な姿になっているのが、福田さんには残念でなりませんでした。

なかなか動けないんですよ

この地域の自治会の役員である福田さ

んは、役員会でこの件について話題にしました。すると、以前からゴミの放置が気になっていたとの声が複数の人からあがり、話し合いの結果、市役所にゴミの撤去を陳情することに決まりました。

翌週、自治会長とともに福田さんは、市の環境保全課に出向きました。課長と若手職員が応対に出てきました。

福田さんはさつそく現場の写真を取り出して、これまでの経緯を説明し、市による対応を依頼しました。これに対して課長は申し訳なさそうに、話を切り出し

ました。

「該当箇所についてはすでに苦情が寄せられており、現場も見に行っているんですが、あそこは私有地なので、原則として撤去する責任は、土地の持ち主にあるのです。撤去するように何度も申し入れてはいるのですが、遠方に住んでいる方なのでなかなか動いてもらえず、市としてもそれ以上強制することはなかなか難しいのです……」

福田さんは、「住宅地の近くに残されたたいへん貴重な自然ですから、何とか特別に配慮してもらえませんか」



と重ねてお願いしましたが、望ましい返事はありません。

「同じような事例が市内のあちこちであって、市のほうとしても何とかしなければとは考えているのですが、予算も人手も足りない状況では、なかなか動けないんですよ」

このような説明が繰り返されるばかりで、進展はありませんでした。こちらの状況に担当者は一定の理解を示してくれたのですが、具体的に動いてくれなければ何ともなりません。

その後の自治会に報告しましたが、「役所が動いてくれないのならば仕方がない」という意見が多く、とりあえず現状のままということになりました。

公共モラルの

衰退



現在、ゴミの不法投棄の問題は全国各地で大きな問題になっています。また、公園や高速道路のサービスイリアなどのゴミ箱に家庭ゴミが持ち込まれるという例も後を絶ちません。そのほかにも、さまざまな公共モラルの衰退が問題となっています。例えば、タクシー代わりの救急車の利用、図書館の本の切り抜きや書き込みといった公共物の濫用や破壊などです。

こうした問題の背景には、公共の利益よりもまず自分の利益を優先する意識や、

共有物だから自分も自由に使う権利があるという身勝手な論理があるのではないでしょうか。

もし社会の多くの人がこうした考えを持ったならば、とうてい社会を維持していくことはできません。公共のモラルや規範意識といったものが社会を支えているからです。社会全体に公共心を取り戻すこと、そして一人ひとりが社会を支えていく意識を持つことが今、必要なのではないでしょうか。





地域は自分たちで守る

ある日のこと、福田さんはテレビで、地域の問題を住民の力で解決している人たちの特集番組を目にしました。いろいろな取り組みが紹介される中で福田さんが感心したのは、地域の小児医療を守る



ためにお母さんたちが立ち上がった話でした。その内容は次のようなものでした。

※

兵庫県丹波市の県立柏原病院では医師不足により、小児科の存続が危ぶまれる状態となっていました。地域のお母さんたちが、「県立柏原病院の小児科を守る会」を立ち上げ、県に対して小児科医師の招聘を求める署名活動を始めました。この運動がほかの活動と異なっていたのは、行政に対応を求める一方で、住民の側に対しても責任ある行動を訴える点にありました。

医師不足の問題について学ぶ中で、自分たち患者側の行動が医師不足の原因の一つとなつていることに気づきました。つまり、まるでコンビニでも利用するかのような安易な気持ちで、軽い症状であつても夜や休日などの診療時間外に病院を利用する患者側の行動が、結果として小児科の医師の負担を重くしていたことに気がついたのでした。

そこでこの会では、署名活動を行う一方で、「子どもを守ろう お医者さんを守ろう」というメッセージを掲げてチラシやステッカーにして住民に訴えかけ、安易な病院受診を慎むよう呼びかけました。特にユニークな取り組みは、子供の症状別のチャート(早見表)の作成でした。発熱などの症状の程度に応じて「様子を

見る」「かかりつけの病院を受診する」「救急車を呼ぶ」などの対処法を図に示したもので、これに従えば、子育て経験の浅いお母さんでも落ち着いて対処できるといふものでした。

そのほかにも、さまざまな形で「節度ある受診」を住民に呼びかけた結果、住民の意識が少しずつ変わり、医師の負担も軽減されるようになりました。

福田さんはこの番組を見て、行政に任せきりにするのではなく、自分たちの責任を自覚して問題解決のために動き出したお母さんたちの姿に深く感銘を受けました。そして自分たちの地域の環境を守るために、まず自分たちの手でできることから始めようと決意しました。



まず動き出そう

福田さんは、次の自治会の役員会で、そのテレビ番組の話をして、自分たちの手でゴミの問題に取り組むことを提案しました。

福田さんが話し終わると、副会長の中谷さんが話し始めました。

「福田さんの言いたいことは分かるんだけどね、役所が動いてくれないんじゃないでしょうか。私たちだけでできることは限られているんだから」

中谷さんの意見に代表されるとおり、場の雰囲気は消極的なものでした。福田さんの熱心な呼びかけに賛同する人も少



しずつ出てきました。流れは変わらな
いままでした。一時間ほど話し合いまし
たが、自治会全体の取り組みにはできず、
有志が呼びかける形で活動を行うことを
認めてもらいました。



その後、福田さんを含めて五名の有志
が集まり、住民に呼びかけて少人数から
活動を始めることになりました。

まず市の環境保全課に仲介してもらい、
土地の所有者からゴミの片付けの了承を
得ることができました。また集まったゴ
ミは市の清掃工場に持ち込んで無料で処
分してもらうことも認めてもらいました。
活動日を六月第一日曜日と決定し、回
覧板を通じて地域の人たちに協力を呼び
かけました。また簡単なポスターを街角
の掲示板に貼ったり、クチコミで誘いか
けたりしました。

参加の誘いに快く応じてくれる人もい
ましたが、その他は問い合わせの電話が
ちらほら来るくらいで、反応は期待した
ほどではありませんでした。



動き出した清掃奉仕作業

不安を抱えたまま、当日の朝が来ました。集合時間の朝九時近くになると、少しずつ人が集まってきました。多くが発起人の家族や友人でしたが、掲示板を見 てきたという人も数名いて、最終的には

十五名ほどの人が参加してくれました。

簡単な挨拶の後、さっそく作業の開始です。泥の中から目に付くゴミを次々と運び出しますが、ゴミは何層にも重なって いて、後から後から出てきます。大きなタイヤなどは三人がかりで掘り出しました。

泥だらけになって作業を続けていると、

散歩の人が通りかかりましたが、チラッとこちらを見ただけで、通り過ぎていきました。少し寂しい思いを感じながらも、福田さんは黙々と作業を続けていきました。

休憩をはさんで午前中いっぱい作業を続け、予定どおりにお昼で終了することになりました。ゴミ袋は山のように積み上げられ、一定の範囲はきれいになりましたが、全体からするとまだまだほんの一部です。

汗をぬぐい、用意しておいたお茶を一杯飲むと、福田さんは参加した一人ひと



りに声をかけていきました。

「今日はどうもありがとうございます。大変でしたね」

「疲れたけれど、いい汗をかかせてもらいました」

「来月もよろしく願います」

「今度は誰か連れてきますよ」

「先は長いけれど、がんばりましょう」

笑顔でこたえる参加者を見て、福田さんは少しほっとしました。

少しずつ広がる ボランティアの輪

毎月一回、定期的に活動を行っていくうちに、少しずつ参加者も増え、要領もつかめてきたので、徐々に作業がはかどるようになり、片付いた範囲もずいぶん広がりました。

福田さんは見回りを兼ねて、早朝にそのコースを散歩することが多くなりました

た。あるとき、すでに片付けられた場所には、ほとんど新しいゴミが捨てられていないことに気づきました。どうやら周りにゴミがないと、捨てるのに抵抗を感じるようです。

「少しずつでも効果が出てきたかな」

少し微笑んでつぶやく福田さんの顔に、



木漏れ日が降り注いでいました。

十月の活動日には、うれしいことがありました。清掃にあまり乗り気でなかった自治会の副会長の中谷さんが来てくれたことです。自治会の役員会で、現場の写真添えて行われた報告を聞いて感じるところがあったようです。

少し恥ずかしそうに笑いながら、「福田さんが一生懸命やっているのを聞いてね、少しはお手伝いしようかなと思って来ましたよ」と話す中谷さんを見て、なぜか胸が熱くなってきました。

クチコミのおかげもあってか、中谷さんのように自発的に参加する人は、回を追うごとに増えてきました。親子連れの参加も増え、にぎやかになってきました。お茶やお菓子を差し入れてくれる人もい

ます。また市の職員も視察がてら一緒に参加してくれるようになりました。多くの人の協力を得ることができて、少しずつですが確実にゴミは片付いていきます。



強くなつた地域のつながり

活動を始めてちょうど一年が過ぎた六月には、すべての区域のゴミが取り除かれました。新たにゴミが捨てられても住民が見つけ次第すぐに回収するようになつたために、以前のようにゴミがたまっていくことはありません。

こうした活動は行政も動かすことになりました。タバコの「ポイ捨て禁止」の看板かんばんが立てられました。また市内の他の地域でも同じような動きが出てきました。市が呼びかけて不法投棄監視ボランティアかんしの登録制度とうろくも始まり、散歩がてら見回りに出る人も増えてきました。

福田さんたちのグループは、さらに環境整備を続けていくこととなりました。道端みちばたの小さな空き地に手製のベンチを置いて、草花を植えることにしました。散歩をする人も増え、花の手入れをしていると、「ご苦労様です」と声をかけられることもしばしばです。

自分のお気に入りの道を、他の人たちにも楽しんでもらえることが、福田さんにとつての何よりの喜びとなりました。また、ボランティア活動を通じて、地域の人のつながりは強くなりました。

小さな一歩の積み重ね



現在、地域社会は治安、環境、福祉、教育、医療等のさまざまな問題に直面しています。これまでこうした公共の問題に対しては地方自治体が主に引き受け、住民に対する公共サービスという形で進められてきました。

しかし最近では、ボランティアやNPO（民間非営利団体）という形で、地域の住民が公共の領域の問題に向けて積極的に行動を起こす動きが各地で見られます。特に住民たちが自分たちの生活を守るための責任を自覚して活動を進めることも増えてきています。

地域の問題に対して、自分たちでまずできることから始めてみる。そうした小さな一歩の積み重ねが、公共モラルを高め、地域を変えていくことにつながります。